THE SAISON FOUNDATION

viewpoint

103

公益財団法人セゾン文化財団

【vjú:póint: 視点、観点、見地、立場】

セゾン文化財団ニュースレター 第103号
The Saison Foundation Newsletter
2024年4月30日発行
30 April 2024
https://www.saison.or.jp

目次◉
[特集：あったらいいな！ ワクワクするような劇場の託児サービス]

01 金森 香
託児と鑑賞のはざまのマジカルアワーを巡って

02 多田淳之介
子供も大人も当たり前にアートを楽しむ未来へ

03 石井 惠
座・高円寺の魔法

【特集】

あったらいいな！ ワクワクするような 劇場の託児サービス

横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）2023で当財団が舞台芸術の活動継続に必要な取り組みを考えるラウンドテーブルを開催した際、本号にご寄稿いただいた金森香さんから、「劇場の託児サービスがより豊かなものになると、さらに子どもも楽しめるのではないか」というご意見をいただいた。その言葉に触発され、予算も労力も限られる中で何ができるのかと、現在の課題を踏まえ、これからの工夫について考えてみたいと思った。

劇場の託児サービス利用経験や舞台芸術界の様々な事例から発想されたプロデューサーによる新たなアイデア、舞台芸術界での豊富な経験に基づくアーティストそして芸術監督としての問題意識と育児の実感から生まれた取り組み、さらに制作者から見た地域に根付いた劇場の取り組みの一環としての託児サービスの工夫と努力に関するご寄稿から、劇場の託児サービスの今後について希望が持てた。本号で紹介されている事例から、読者の皆様からも新たなアイデアの実践が生まれることを願っている。

01

金森 香
Kao KANAMORI

託児と鑑賞のはざまの マジカルアワーを巡って

子育て時間にスパイスを、子どもも1人の人間だ

子どもを迎えてから、私だって、観劇する機会は激減した。こんなに舞台が大好物な私でさえ、である。預かってくれる人がいないから。夜公演は寝かしつける時間に重なってしまうから。といった理由もあるが、初めての子育ては驚きと笑いの連続で、一生に今しかない時間を共にちゃんと過ごしたいという部分も多分にあった。子どもの目線で幼少期を生き直すような体験は、大変さもあるが発見に満ちていて、色んな意味で目が離せなかった。

しかし、どうも最近になって、食事等もそうなのだが、子どもの嗜好や目線に合わせるばかりでなくとも良いのでは？ と思うようになっ

た。勿論、食べにくいものばかり出していたら食事嫌いや栄養不全になってしまうかもだが「ちょっと無理かもしれないけど?」と思うようなスパイスの効いた料理でも、試しに口にさせると意外といけるケースもあって、「一般的には子どもらしくないイメージのものだけど、私は関心があるんだが君はどう?」と言った具合に、親の関心と重ね合わせて、1人の人間として接しつつ、時には冒険したり、なだらかに大人っぽい体験をさせたりしても良さそうだ、と考えるようになった。それにより親側の無意識の小さい我慢のようなものが軽減され、同胞として共通の楽しみが増えて親子相互の豊かな時間に繋がると考えるようになった。子どもが年齢を重ねてきて見えた違いかもしれない。

観劇体験につながる託児時間ってできないのかな?

それで、本題である。筆者がこれまで何度か利用した「観劇中の託児サービス」では、ほとんどの場合、そういった意味で親側の嗜好である「観劇の楽しみ」とは関係ない時間が子どもに提供されてきたように思う。

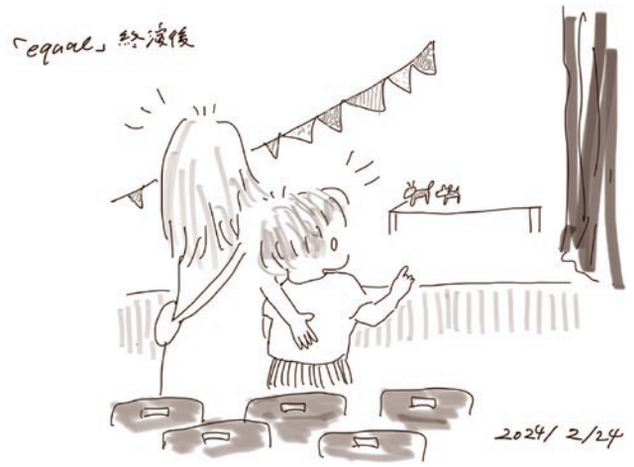
一般的に我が国で「観劇中の託児サービス」が整っているのは規模のある公共劇場等の場合であり、そこでは民間の託児・保育の専門会社が委託されて現場運営していることが多い。つまり、担い手は託児のプロであるが、演劇関係者ではないので、当然のことながら託児の内容に舞台芸術との関連性が持たせられない。

もちろん、子どもを預けられることはものすごく助かるし、ないよりあったほうがいい。子どもは保育園や幼稚園での普段の遊びに似た質の時間を過ごすことで、親から離れても安心して待つことができるという面もあろう。しかし、もし可能なら、もうちょっと親側が過ごしている「観劇体験」との関連性があり、劇場の魅力に触れるきっかけになるような時間にできないのかなと、一演劇ファンとしては感じてしまうのだった。公演時間になって親に置いていかれる負の体験から劇場の記憶が始まらないでほしい、こんな素敵な場所なのだから、とも。

そこで、本稿では、もしかしてやや極端なケースかもしれないが、私が実際に体験したサービスや、聞いた話を例にとって、現状と未来像に向き合ってみたい。私には託児の専門性があるわけでもなく、劇場の施設管理者でもなく、単なる「舞台業界の一隅で働く1人の子持ちの成人」に過ぎず、網羅的な調査研究をした研究者でもない。あくまで一個人の見解であることをご容赦いただきつつ、エクストリームユーザーのつぶやきが何かの参考になることを願うものである。

劇場のドアを誰に対しても閉ざさない——「マームとジプシー」の場合

先日、マームとジプシーの公演『equal』に行ってきた。我が家には、同劇団による子ども向け作品『めにみえない、みみにしたい』をオンライン配信でヘビロテ鑑賞している小さなマームファンの息子(6歳・未就学)がいるのだが、マームとジプシー制作の方が彼のことを覚えていて下さり、ありがたいことに「お子さんもご一緒にどうぞ、最後まで観られなかったらホワイエ出てきて大丈夫ですよ、スタッフの誰かが一緒にいるので!」とお申し出下さった。すっかり大船に乗ったような気持ちになり、いきおい夫と3名で観劇したのだが、内容は決して子供向けではなかったものの、少年時代の回顧シーンなどもあったからか、息子は最後まで観ることができた。折しも前日に「下北沢国際人形劇祭」で舞台に上がるステージツアーを体験した直後だったこともあり、終演後は息子が率先して舞台装置を間近で確認したいと、小道具の細かい部分をかぶりつきでチェックし、なるほど、こうなってたんだ! など本人なりに納得したりしていて、登場人物や物語について帰り道の対話を家族で楽しんだりもした。大人達が読み解くドラマとはちょっと違う物語を子どもは子どもの視点から見出していたのも面白く、イルカにしか聴こえない音楽があるように、彼らにしか見えない物語が息づいているんだな、そこには正解も間違いもないのかも、とさえ感じた。



イラストレーション:筆者

観劇に対する緊張や恐れをほぐすような声がけが、安心できる鑑賞時間をつくる

これはしかし関係者的にたまたま恩恵を受けられたということか?と思いきやそうではなく、同劇団は、主宰者であり劇作家の藤田貴大氏の意図もあり、子どもを育てている人(を含めたいかなる人)に対して、可能な限り鑑賞の門戸を閉じない、という方針があると後日聞いてちょっと驚いた。同劇団の代表でプロデューサーの林香菜氏によれば、劇場主催公演の場合は、館の事情やリスク管理体制などもあり、全公演で徹底できない場合もあるが、劇団主催公演においては、少なくともこの方針に従って運営をしているという。あえて「未就学NG」あるいは「子どもOK」という表記はせず、もしお客様から子どもの鑑賞に関する問い合わせがあった場合には、作品の内容や上演時間、暗くなるシーンや静かなシーンがあること、場合によってはガラス張りの子ども鑑賞室や託児を勧めたりなどを丁寧に説明した上で、それでも一緒に観劇を希望する観客に関しては受け入れているという。そして、どうしても観られなくなったらロビーに出て良い、保育士免許を持つ託児スタッフはいないけれど、外でスタッフが子どもと一緒にいることは可能だと伝えるらしい。またこれに関しては「支援」という感覚はなく、最初から一方的に拒否せず、お客様一人一人とコミュニケーションを取り、良い方法を探す努力を、まずはしてみるというスタンスでいるだけ、とのことだ。

生活と演劇活動を集団で支える姿勢

このようなマームとジプシーにおける支援体制は創作期間におい

『めにみえない、みみにしたい』公演より　撮影：細野晋司　提供：マームとジプシー

チェルフィッチュと一緒に半透明になってみよう
（『コネリング・スタディ』2019より）

ても一貫していて、子育て中の俳優や公演スタッフらの子どもを稽古場に連れてくる際は基本的には制作スタッフが一緒に過ごし、それが難しい場合は、別の人員を手配するとのことだった。

それと、これは厳密には託児の話ではないが、同劇団が彩の国さいたま芸術劇場と制作した子ども向け作品『めにみえない、みみにしたい』では、ロビーに独自の趣向を凝らした設えが用意されていた。藤田氏や俳優が好きな絵本、カードゲーム、ボードゲーム、馬のフィギュア、ボールプール、木製のトイピアノなどが用意されていて、見るからに子どもがフラフラと近寄っていきそうなスペースであり、場外に出てきても作品の世界に触れられるようにしているとのことだった。初めての劇場体験が、どんな子どもにとっても素敵であってほしいという演劇者の思いと、公演を重ねる中で積み重なった子どもたちとの時間がじんわり伝わってくる空間だったことを覚えている。

precogが目指す、子どもも大人も障害のある人も包摂する劇場空間

もう一つの事例をご紹介する。2019年〜21年にかけて株式会社precogがセゾン文化財団の助成を受けて行った「コネリング・スタディ」という事業である[1)]。これはまさに、現状の託児サービスが、ともすると子どもたちの劇場嫌いを助長することになりかねないという危機感が一つの企画動機であったと、同社代表取締役であり現在2児の母である中村茜氏は言う。この事業では、観劇行為自体が、単なる受け身の時間ではなく、自発的な学びの場となることを目指して舞台芸術を「教材」とするワークショップを目指して、鑑賞体験の質を変転させるような新たな価値作りを試みたそうだ。

具体的には、何名かのアーティストとワークショップファシリテーターらが協働して実験的な取り組みを行ったのだが、例えば、チェルフィッチュ×金氏徹平『消しゴム山』（2019年初演）に向けたワークショップでは、子どもたちに「新しい演劇の手法を開発するアーティスト」として参加してもらうような仕組みを考えたのだと言う。コンセプトの難解さも想定されたが、蓋を開けてみると、子どもたちはワークショップのお題を、驚くべき柔軟な感性で理解し、演出家の岡田利規氏や出演者らに大いに刺激を与える結果となったそうだ。

残念ながら、コロナ禍で延期された2021年の東京公演の暁には、声を出したり公演中に出入りしたりしても良い「鑑賞マナーハードル低めの回」と称したリラックスパフォーマンスを実施し、前段のワークショップに参加した子どもをはじめ、子連れ客が見に来やすい環境設計を試みたと言う。最終的にはワークショップ参加者に限らず、子育て層が鑑賞に戻ってくるきっかけとなり、また、大人でも、例えばトイレが近い方、鑑賞中に声が出てしまう不安がある方などが来やすくなった、などの反響があり、その後もprecogの主催公演では、このリラックスパフォーマンスを標準化する方針となったそうだ。

なお、その後同社は更に考えを推し進める形で、例えば参加型の音楽会やユニバーサル上映会といった、そもそも作品自体がワイワイ観ながら鑑賞しても良いような、障害児も大人も子どもも一緒に楽しめる、緊張感のない開かれたプログラムの開発にも注力しているという。子どものための場づくりが、ユニバーサルな劇場の場の可能性を切り拓く結果となったことは、興味深い。

私自身、precogでアクセシビリティに関する事業やイベント運営に仕事で携わっていたりもするので、息子と公演現場に行くこともしばしばある。興味深いことに、彼の中では劇を観ることと、車椅子の方や目の見えにくい方に出会う、ということがひとつながりになっているようで、あるとき彼の大好きな『アナと雪の女王』（劇団四季）を念願叶って観に行くにあたり「明日のミュージカルは、車椅子の人はどこからみるの?」と素朴な疑問を投げかけてきてびっくりしたことがあった。演目を楽しみにする感覚の流れで車椅子ユーザーのことを自然に想像したらしい。余談ではあるが、イベントのアクセシビリティを考えるに現場運営において子どもに向き合うことと障害のある方々に向き合うことは、重なり合う部分も大きく（全てではないが）そのことが、混じり合いを生み出し、結果として劇場を中心にインクルーシブ教育の場が育まれ得るのでは?と、その可能性に我が子を見て一人ワクワクしたのであった。

劇場や劇団に紐づかない託児サービスの可能性

さて、今一度託児に話を戻そう。現状の公共劇場の託児サービスに対して、私のような者がもつ「舞台への偏愛」の反映を期待するのは即座には難しいのだとして、マームとジプシーやprecogのよう

1)「コネリングスタディ」については以下の記事参照: viewpoint第95号（2021年9月発行）臼井隆志氏著「オンラインにおけるアートエデュケーション――コネリングスタディでの実践をふりかえる」
https://www.saison.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/2021/10/viewpoint_95.pdf#page=10

に、個々の劇団や制作会社がそれぞれ託児に対する取り組みを実は重ねているというケースは探せば他にも個性豊かにあるのかもしれない。しかし、託児提供は場所の準備、申込受付も必要で、コストや人手がかかるものであるため、全ての公演や劇団が対応できるものではない。

そこで次に私は、劇場でも劇団でもない例として、舞台芸術などのチケット販売をてがけるウェブサイト「カンフェティ」が提供する託児サービスについて、同サイトを運営するロングランプランニング株式会社の小森和博氏にお話しを伺ってみた。

カンフェティでのサービスは、チケットを同サービス経由で購入したお客様に対して無料で提供されているものであり、代表の榑松大剛氏が同社のCSR事業として10年前にスタートしたそうだ。最初は新宿にある本社会議室で預かっていたが、現在ではイベント託児専門業者の協業パートナーである株式会社マザーズの東銀座にある託児所で行っている。立地としては、歌舞伎座、東京宝塚劇場、帝劇、日生劇場など、劇場の多い地域ではあるが、無料だからか、必ずしも近隣での公演に付随した利用に限らず、劇場と託児所が1時間程度離れていたとしても、利用する方は少なからずいるという。また、託児の前後に買い物ができる立地というのもポイントかもしれない。

この話をきくと、もしかして「劇場」や「劇団」に紐づかずとも、都心で運営されていて、文化的な学びの場となり、親の大好きな演劇のおもしろさを子どもにも伝えるような内容が提供されるのだとしたら、「シアターゴウアー向け託児」が成り立つ可能性はあるのでは？と思ってしまう。

例えば、保育者がすぐに使える「観劇中のお遊びキット」を託児施設用に開発し、親が鑑賞中の作品のあらすじが子ども向け紙芝居になったもの、なんかがあったら理想的だが、個々の対応が難しければ、「お芝居の作り方」とか「劇場の照明さん物語」など、舞台の裏側の魅力を知る紙芝居や絵本でもいいかもしれない。現在活躍する舞台人の幼少期を知る「絵本でしる三谷幸喜くん」とかもいい（ふと、テイラー・スウィフトやスティーブ・ジョブスなどの幼少期を物語る子ども向け現代偉人シリーズ「Little People, BIG DREAMS」[Frances Lincoln出版]を真似して思いついたまで）。こういったツールがあれば、保育者側に演劇に関する基礎知識がなくとも、絵本を読みきかせるスキルがあれば大丈夫そうではないか。託児を終えた子どもと観劇後の親が、芝居の話で一杯（ジュースですが）やれるかもしれない。

提供：ロングランプランニング株式会社・株式会社マザーズ

子どもの創造性を育む習い事やイベントというのは、東京にはたくさんあるように見えるが、これというタイミングでは案外探すのが難しい。また、習い事やプリスクールや民間学童まで、それなりに高価格の学びにお金を払う忙しい親たちも一定数いる。もちろん無償や安価での選択肢がある上で、特段の体験を希望する人たち向けの話ではあるが、場合によっては、未就学児童だけでなく、小学校低学年位までを対象として有償でもサービスのニーズはあるのでは？と妄想は膨らむ。

コミューンとしての託児支援・作り手の横顔を子どもたちに知ってほしい

劇団というある種の共同体による託児支援については、マームとジプシーの例のみならず、おそらく全国津々浦々、小規模の劇団で多く見られることであろう。旅一座的なところからスタートした業界でもあるし、寝食をともにする「同じ釜の飯」的精神の根付いた業界であり、コミュニティで個々の生活を含めて共有しているケースも多かろう。昨今は世の中全体が仕事とプライベートを分ける向きが強いので、昔ほどではないだろうが、同好的な集まりから始まる劇団はまだまだあるし、まずは団員同士の助け合いが基本だとして、それがストレッチして、常連客さん、そのお友達、といった形で託児支援の対象が広がることもあるだろう。

演劇業界に長年従事されてきたカンフェティの小森氏によると、例えばかつてのコマ劇場、シアターアプル、サンシャイン劇場等でも楽屋や会議室などを使いながら、お客様のご要望に応じて柔軟に託児対応をしてきたと言う。時には、カラフルな衣装を着たままの役者が、出番を終えて託児に参加するような場面もあったそうで、これは子どもたちにとって、忘れられない特別な体験になったのでは？と想像する。

自分の話で恐縮だが、かくいう私も両親が演劇畑で仕事をしてきたので、幼少期に劇団の方々にかなりお世話になった経験がある。例えばデザインの仕事場では助手さん達にお絵描きの相手をしてもらい、役者さんたちが発声練習をしている稽古場や合宿にも連れて行ってもらって、遊んでいただいた。馴染みの大好きな俳優さんが、本番では衣装をまとい別な誰かの人生を生きる様子を見て、すっかりそのダイナミズムに魅了されたことが、自分の原体験となっているとさえ言える。

サービス案｜集まれ！子育て同盟

現在日本の観劇人口減少が課題となっているが、こうした体験が、関係者家族のみならず、多くの人に提供されるサービスとなれば、もしかして舞台との距離はガラッと変わるんじゃないかしら。

これは独自の口コミ調べなので数のほどは定かではないが、保育士の免許を持ってベビーシッターの仕事と役者業を兼務して生活している人は少なからずいると聞いた。だとしたら、そんな「保育」と「舞台」両方のスキルがある人を集めて、もう少し「鑑賞時間」との乖離がない、なだらかな体験の提供も可能になるかもしれない。それこそ、衣装をつけた役者さんが託児係になるだけでもワクワクするし、上演中作品の舞台映像を流しながら、子どもに翻訳するような時間が

イラストレーション：筆者

あってもいいかもしれない。

更には、稽古期間の託児も含めて同盟を結んで、例えばお世話係として登録した人は、自分の子どもも安価で預けられるようにするなど互助会的なネットワークにして、クリエーション期間の育児負担を軽くしたり、演劇者の働き方の多様性を支えたりするようなことも可能かもしれない。

マジカルアワーは作れるか？

幾分ブレストめいたアイデアの種を無責任に撒き散らかしてしまったが、さて最初の問いに戻るとどうだろう。観劇体験につながる託児時間ってできないのかな？であるが、さて作らねばならぬという気がしてきた。

観劇体験につながる託児時間、そしてそこから始まる最初の劇場体験への魅力設計は、舞台業界全体にとって、子育て世代の鑑賞離脱を防ぐ意味でも、次世代の新たな観客層を開拓するという意味でも、演劇者の働き方の多様性を支える意味でも、不可欠ではなかろうか。託児と鑑賞の間に、鮮やかなグラデーションを描くマジカルアワーを開発することで、未来の舞台業界が開かれていくような気がしてならない。

などと熱く書いていたらそろそろお迎えの時間が来た。そう、子育て者は忙しいのだ。でも劇場が大好きなのだ。子どもも面白いのだ。だから諦めたくないし、未来にも繋ぎたいのだ。

金森 香（かなもり・かお）

2001年、ファッションブランド「シアタープロダクツ」をつくり2017年まで経営にあたる。2010年、NPO法人DRIFTERS INTERNATIONALを設立。スクール事業や芸術祭などを行い現在に至る。株式会社precogでは2020年よりバリアフリー型のオンライン劇場「THEATRE for ALL」や「まるっとみんなで映画祭」、EPAD主催のバリアフリー上映企画等に携わる。代表的なプロデュース作品は、True Colors FASHION「対話する衣服」（ここのがっこう・河合宏樹）・落合陽一総合演出「多様性を未来に放つ ダイバーシティファッションショー」、AR三兄弟「バーチャル身体の祭典」など。

https://www.kaokanamori.com/

02

多田淳之介
Junnosuke TADA

子供も大人も当たり前にアートを楽しむ未来へ

演出家をしております、多田淳之介と申します。本題に入る前に自分の活動と育児のことからお伝えできればと思います。普段は東京デスロックという劇団を主宰しながら劇団や劇場からの依頼で作品づくりをしています。劇団としても地域の劇場、劇団、コミュニティと協働することに重きを置いていて、私自身も公共ホールの芸術監督や自治体のアートディレクターなどの経験から、学校や文化施設でのアウトリーチ、子供、親子、シニア、障害のある方などさまざまな人たちが舞台芸術を通じて繋がりや楽しみを育めるような場づくりの活動を続けています。

「教育」をテーマにした作品作りから思うこと

近年は戯曲の上演のほかに『Anti Human Education』という“教育”をテーマにした授業体験型作品を連作で作っていて、この作品を作るきっかけになったのも自分の子育ての経験からでした。以前も仕事で教育現場に携わることは多かったのですが、あくまで学校側の立場に協力することが多かったので、子供を持って初めて保護者の立場で関わることで当事者としての全く違った景色が見えてきました。

自分の育児経験としては、義務教育が始まる以前の保育所や幼稚園までは子供ものびのびとできて良い環境だと感じることも多く、お遊戯会やイベントでも失敗を正すでもなく、その子なりの表現や成長を先生も保護者も喜べるような素敵な環境でした。ところが小学校に入ると、一年生の最初の体育の授業は45分間整列の練習だけ、苗字にさん付けであだ名禁止、キャラクター文房具禁止、いまだに管理教育が蔓延し子供たちのコミュニケーション能力や問題解決能力を奪う謎のルールだらけでした。幼児教育まで許されていた自由な表現も義務教育からは表現ではなく技術を求められ、その結果芸術や表現が苦手になっていく子供たち。自分の育った時代と変わっていないどころか、コミュニケーションや表現の機会が奪われている状況に愕然としました。

改めて日本の公教育の現状などを調べていくと、教育基本法にしても教育を受ける子供ではなく教育する側の都合だと感じますし、日本の公教育が何を目指しているのかは甚だ疑問です。ちなみに教育基本法の第一条（教育の目的）には「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」とあります。一見もっともで、間違っているとは言いませんが、そもそも「国家及び社会の形成者」として必要な資質とはなんでしょうか？ その資質を目指して小学一年生の最初の体育の授業は行われているのでしょうか？『Anti Human Education』シリーズでは、いわゆる

社会不適合者と呼ばれる人たちが受けてきた教育環境を語る講義、教育従事者による現在の教育状況の紹介やフリースクールの子供たちと一緒に作る授業など、教育の観点から人間や今の社会を捉える活動をしています。さらには教育当事者ではない人にも教育について問題意識を持ってもらえたらと思っています。将来あなたの介護をするかもしれない人が今育っているのですから。

ただこれまで学校と関わらせてもらう中で特に公教育を変えるのは難しいだろうという実感はあります。先生たちの労働環境の問題もありますし、教員育成の問題、旧来の制度や慣例によって変えられない構造もあり、志のある先生が私立に流れていくのもよくわかります。学校で学べないことは地域で担えていた時代もありましたが、地域コミュニティも頼れない現在は官民問わず地域の文化施設や団体で受け皿を作っていくしかないでしょう。

ここ数年新しくできる劇場のほとんどが優れた作品の上演だけではなく地域コミュニティの拠点となることを求められています。社会も文化施設に期待している、もしくは他に頼れるものがないのだと思います。ただ劇場が単独でできることは限られています。同じく学校や地域の団体や施設にできることも限られています。これからの劇場は、学校、地域の団体や施設と手を繋ぎ、舞台芸術のリソースを使って教育やコミュニティ形成に携わっていくことが求められ、今こそ文化芸術が地域で活躍するチャンスだと思います。

育児経験からの気づき

とにかく子供が生まれてからは発見の連続でした。日々の子の成長にも驚かされますが、育児についてはなぜ今までこのことを誰からも教わる機会がなかったのだろうということばかりです。いわゆるワンオペと言われる家事と育児を一人でやらなくてはいけないことの困難さや、今まで普通だと思っていた社会生活に全く参加できなくなることには本当に驚きました。子供を連れて外出するにはもはや戦いに挑む戦士の如くいかなる状況にも備える万全の準備と社会の冷風に耐える心意気が必要で、まだ男性である自分には「お父さん頑張ってるね」という寛容の眼差しを感じることもありますが、これが女性になるとその心労はいかばかりでしょうか。

映画鑑賞やコンサート、観劇へのハードルは当然高く、ハードルというよりも到底越えられない高い壁が聳え立っている状況です。自分の周りにも育児をしながら舞台芸術に関わっている方はいましたが、その背景にどれだけの苦労や熱意があったのか、どれだけ苦労してその時間を作っていたのかをようやく理解することができました。我が家では子供が3歳になって保育所を利用するようになったのですが、初めて保育所を利用した時の3年ぶりに訪れた子供がいない時間のありがたさは忘れられません。

そして劇場の託児サービスのありがたさも改めて実感することになります。ただ観劇中もやはり気持ちのどこかで子供を心配してしまいますし、何かあった時には当然途中で退出する段取りにもなっています。何よりも子供を預けて自分だけが楽しんでいるという罪悪感から観劇に集中しきれないという経験は、自分を含め多くの方がされているのではないでしょうか。

自分自身の経験としては育児から感じられる喜びや幸せは何にも代え難いもので、パートナーに比べれば家の外で仕事をして自由になる時間もあり、以前と全く同じ生活ができないことも我慢の範疇ではありました。ただ劇場、美術館、映画館に行く機会というのは格段に少なくなり、育児中は本当にさまざまなストレスがあって精神的にも健康を維持していくには周りのサポートが必要だということはよくわかりました。長らく劇場や地域で芸術が届きにくい人にいかに芸術を届けられるかを考えて子供向けのプログラムも沢山やってきましたが、自分が育児に携わることで育児中の保護者にも芸術が必要だということにようやく気がつきました。

「アトカル・マジカル学園」誕生

それからは育児中の方向けのプログラムも考えるようになり、普段は聞きにくい育児の話を聞く場や、我が子の自慢話を思いっきりできる場（これがなかなかママ友とはできない）、乳幼児を抱えながらできる演劇ワークショップなども開催しました。参加者にさらにどんな場があると良いかを伺うと、やはり子供から離れられる場というのが一番多かったと思います。それは育児が大変だというだけではなく、子供優先ではない自分のことを優先できる環境が必要とされているのだと思います。さらには子供向けのプログラムを考える時も保護者にとって子供が家にいないと助かる時間帯はいつかと考えるようにもなりました。作品の開演時間なども含め間接的にも育児を支援できることはまだまだあると思います。

そんな折に2019年に東アジア文化都市という事業を豊島区が請け負うことになり、舞台芸術部門の総合ディレクターを宮城聡氏が務め、自分は舞台芸術部門の事業ディレクターとしてプログラム作りに携わることになりました。そこで自分が考えた企画は、これまで国際アート・カルチャー都市構想を掲げ文化芸術に力を入れてきた豊島区がこの先も文化芸術に力を入れ続けたら、子供も大人も当たり前にアートを楽しむ素敵な未来が訪れるだろうという想像から、未来の学校「アトカル・マジカル学園」が2019年の豊島区にやってきて、未来のアートプログラムを誰もが体験できるという企画でした。

企画の内容としては区内全域で子供からシニアまで全世代を対象に演劇、ダンス、美術のアーティストによる“へんしん”をテーマにした出張教室「マジカルへんしん教室」、親子が同級生になる「としまおやこ小学校」、そして観劇や映画鑑賞、コンサートなど、育児中の保護者の芸術体験と子供たちの芸術体験を両立させる、アート体験支援型託児プログラム「アートサポート児童館」でした。

「アートサポート児童館」の着想は、以前自分の子供がとある劇場の託児サービスを利用した時に、何か嫌なことがあったようで「もうあそこには行きたくない」と言われたことがありました。子供ですから当然そういうこともあるのは仕方ないことですが、やはり子供を預けて自分だけ観劇しているという罪悪感もあって自分としてはショックでした。それ以来なんとか子供も楽しめて保護者も自分の時間を楽しむことはできないかという思いがあったので「アートサポート児童館」は特に思い入れのあるプログラムでした。

当時の豊島区では同じく宮城聡氏が総合ディレクターを務め、自分も人材育成のプログラムのディレクターとして関わっていた舞台芸術の国際フェスティバル「東京芸術祭」が池袋の東京芸術劇場をメイン会場として開催されていて、豊島区もその実行委員会の構成団体でした。東アジア文化都市舞台芸術部門のプログラムは企画段

東京芸術祭2022 アートサポート児童館

階から今後レガシーとしていかに豊島区内に残していけるかを想定して作っていたので、「アートサポート児童館」については今後東京芸術祭に残していくことを想定して東京芸術祭の期間に合わせて開催することになりました。

アート体験支援型託児プログラム「アートサポート児童館」の内容

託児のシステムとして、保護者は東京芸術祭の演目の観劇だけではなく、映画館やコンサート、美術館、カルチャースクールなど、文化や芸術に関わる用件であれば利用できるようにしました。それが芸術祭や劇場が社会に開いていることでもあると思っています。預けられる子供の年齢は一人でも親以外とのコミュニケーションが取れる4歳以上としました。もちろん0～3歳の育児中の保護者の方が芸術体験から遠いことは間違いないのですが、子供がまた預けられたくなる託児というコンセプトもありこの設定としました。

子供たちに向けては二つのプログラムを用意しました。一つはオリジナルのはっぴ作りをする「HAPPYはっぴ作り」です。まず自分の好きな色のカラービニール袋を選び、自分の好きな色のカラーテープを選び、自分の好きなシールや布や折り紙やモールやさまざまな素材を選んで好きなようにはっぴをデコっていきます。一応はっぴの基本的な作り方は教えますが、それ以外の作り方でもOK、はっぴ以外のものを作ってもOK、何も作らなくてもOKです。子供たちができる限り安心して自由に過ごせることを最優先に場づくりをしていました。直接子供たちと関わるスタッフは、豊島区の保育士派遣事業で活動されている方や地元の大学生たちにお願いしました。

託児にきた子供達はみな夢中になって飾りを選び、几帳面にシールを並べる子やハートを散りばめる子、パンが大好きでパンのシールで全面を埋める子、普段勿体ないと言われてできない贅沢な素材の使い方で大人が驚くような作品を沢山作ってくれました。あとは好きなアニメやキャラクターを印刷して貼り付けられるプリントコーナーも作り、ポケモンや鬼滅の刃、電車、動物、スポーツチーム、印刷しながらその子の好きなものの話を沢山してもらうこともできました。そして作ったはっぴを着て東京芸術劇場の外までパレードをして劇場の前で記念写真を撮るというのも恒例のイベントとして開催していました。

もう一つのプログラムは、岡山県倉敷市で廃材を利用したクリエイティブリユースのミュージアムIDEA R LABを運営し、ミュージアム・エデュケーション・プランナーとして数多くのアートプログラムを手掛けてきた大月ヒロ子さんによる廃材を使った、パペットを作ってお話を作るプログラムを開催しました。こちらも見たことのない素材に子供たちは大喜びでした。ユニークなパペットが沢山できたのはもちろん、ぬいぐるみの綿を抜いて雪合戦をしたり、プロジェクターで影絵を作ったり、こちらも素晴らしいプログラムになりました。

2019年の東アジア文化都市ではこの二つのプログラムを2日間ずつ計4日間の開催で約50名の子供を預かることができました。ワークショップの参加人数としては普通ですが、託児の人数としてはかなり多い人数です。「アトカル・マジカル学園」全体の参加者アンケートでも90%以上の方に、満足した、来年も参加したい、と回答いただけました。

東京芸術祭のプログラムとして

各所の尽力もあり2019年以降もアトカル・マジカル学園のレガシーとして「としまおやこ小学校」は、あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術センター）の事業として、「アートサポート児童館」は東京芸術祭の事業として2023年度まで継続しています（※「おやこ小学校」は2022年より「かぞくアートクラブ」として東京芸術祭直轄事業）。アートサポート児童館は東京芸術祭開催になってからは「HAPPYはっぴ作り」のプログラムを継続して行なっています。ここ数年は一コマ2時間500円、コマに空きがあれば当日申し込み可、延長可というシステムで東京芸術祭のコア期間に合わせて4日間ほど、2023年度に関しては1週間開催しました。

5年目の開催ともなるとリピーター率も高くなり、当初イメージしていた、子供が預けられたくなる託児という目標は達成できたと思います。ある保護者の方からはこの一年池袋西口を通るたびに「次はいつはっぴ作れるの?」と子どもに聞かれ続けたというお話や、開催中もお迎えの時間になっても、もう一着はっぴを作りたいと延長して4時間利用してもらうこともありました。もちろん保護者の方はプラス2時間芸術体験をしてこなくてはいけないという謎のミッションを課されるわけです（笑）。

基本的に保護者の芸術体験も自己申請なので、こっそりショッピングしてきても良いんですが、伺うと観劇はもちろん美術館やご夫婦で映画を観にいかれるなど、上手く利用していただけたようでとても嬉しいです。開催期間中、毎日のように通い詰めてくれた子もいて、ここが居場所だと感じてもらえたこともとても嬉しい出来事でした。コロナ禍があったことで子供を置いて出かけられる機会がさらに減ってしまい、本当にこの機会を作ってもらえて感謝しているという保護者からのお声も印象に残っています。

継続することで利用してくれる方も増えていきましたが、基本的には芸術祭に実装された託児機能なので、利用者はゼロでもこの機能を維持することに意味があると思っています。芸術祭としてもそういう事業だと理解していただけているので今後も続けてもらえること

東京芸術祭2023 アートサポート児童館 ©東京芸術祭2023

を願っています。課題があるとしたら期間をいかに長く開催できるか、芸術祭の期間は常に利用できる形を目指していくのが良いと思っています。

今後の託児や親子向けプログラムの可能性として

例えば「アートサポート児童館」のような託児プログラムは劇場にも恒常的にあったら良いとも思いますし、それはそんなに難しいことでもないと思っています。恐らく一番の課題は予算と人員だと思いますが、公共ホールであればアクセシビリティとして予算をつけるのは難しくない気はしますし、かなりコスパは良いはずです。

公共ホールに絞ってお話しすれば、劇場単体でアーティストに依頼してこの手のプログラムを作るのはあまりお勧めしません。もちろんアーティストの発想はぜひ取り入れてほしいですが、地域には育児や子供、保護者の芸術体験を応援している人たちや場所があるはずです。活躍の場を求めている人たちもいるでしょうから、アーティストも絡めて地域の人や場所とのつながりの中で何ができるかを発想してみるのが良いと思います。恒常的に設置するなら当然持続可能性が大切で、アーティストは去っていきますが地域の人たちは居続けてくれます。担当人員も劇場職員はどこもオーバーワークだと思うので、行政の保育支援員の制度やシルバー人材などにも頼れるとよいと思います。

少し託児から離れますが、以前自分が芸術監督を務めていた埼玉県富士見市の富士見市民文化会館キラリふじみでは、小学生向けの遊び場プログラムを自分の在任時から現在まで10年続けています。内容は月に一度劇場で芸術監督と遊ぶというだけなのですが、子供たちの自由な発想と表現を担保する場として2013年の開始当初から応募者殺到で現在も予約開始1時間以内に定員が埋まるキラーコンテンツになっています。参加した子供や保護者もここからさらに演劇やダンスのワークショップに参加したり公演を観に来たりと劇場の入口事業のお手本のようなプログラムで、おまけに低予算です(笑)。この遊び場プログラムは他の劇場にも移植していて、今は久留米シティプラザと岡山芸術創造劇場ハレノワで人気コンテンツとして実施されています。そして託児プログラムとしても相性が良いので機会があれば今後どこかで遊び場+託児も実現できればと思っています。

芸術や表現を取り入れた託児プログラムの対象を考えるとやはり0〜3歳は成長段階としても難しい部分があると思います。ただ4歳以上に関してはとても可能性があると思っています。アートサポート児童館や子供向けのプログラムでも4歳から小学校低学年の参加率はとても高く、子供の成長過程でも義務教育に突入していくこの時期に芸術に触れて、自分の表現を受け入れてもらう体験や、あそこに行けば受けて入れてもらえるという場はとても大切です。託児でもこの年代の参加率が高いとなると、託児プログラムに芸術や表現の要素を入れることは保護者の託児に対する罪悪感の払拭とアクセシビリティの向上だけではなく、子供たちが芸術を楽しむ場、表現を担保する場としても意味があると改めて思います。是非、地域の文化施設のこれからの親子向けプログラムの可能性の一つとして考えてもらえたら嬉しいです。その先には子供も大人も当たり前にアートを楽しむ未来が待っているはずです。

photo:©平岩享

多田淳之介(ただ・じゅんのすけ)

演出家。東京デスロック主宰。古典からネット上のテキストまで様々な題材を現代演劇作品として上演する。公共劇場の芸術監督、自治体のアートディレクターなどを歴任し、国際・教育・地域を活動の柱として海外公演や国際共同制作、学校や文化施設でのアートを活用したプログラム、子供や親子向けのプログラムなどを数多く手掛ける。2014年『가모메 カルメギ』で韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。2015年度〜2017年度セゾン文化財団シニア・フェロー対象アーティスト。東京芸術祭共同ディレクター(2018年度〜2023年度)。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。

http://deathlock.specters.net/

03

石井 惠
Megumi ISHII

座・高円寺の魔法

JR中央線に乗って外を眺めていると、新宿、中野を過ぎて、高円寺駅に到着する少し手前、進行方向右手に見える、こげ茶色の立方体の建物が、座・高円寺だ。伊東豊雄さんによって設計されたこの劇場は、鉄板でできているとは思えない、波うつ屋根が印象的なことから「テント小屋」のよう、壁に円形の窓が散りばめられていることから「潜水艦」のよう、としばしば例えられる。

もう少し長いものだと「かじりかけのチョコレート」とか「ネズミが住んでいる穴の開いたチーズ」、「コーヒーにつけたらちょっと溶けて茶色く染まった角砂糖」など。一口かじったチョコレートを、そっとテーブルの上に置いて湧きたてのコーヒーを取りに行く怪獣や、忙しそうにチーズのおうちへ入ったり出たりするネズミたちのようすを想像するだけで、笑みがこぼれる。わくわくする気持ち、人がかかわっているぬくもりのようなものが伝わってくる。

それでは、これはどうだろう。「ああ、あの棺桶みたいなところね」。棺桶……。暗い、怖い、中には入りたくない、何をやっているのかわからない。漠然とした不安のようなものが伝わってくる。心にかかったモヤが晴れ、ふらりと入ってみたくなる、そんな気分に変えることはできるのだろうか。これが私たちの挑戦の始まりだった。

「座」に込められた思い

「座」・高円寺は、見て字のごとく、ひとつ屋根の下にさまざまな人たちが集い、車座になって語り合う、そんな場所になってほしいという思いを込めて、区民の方によってつけられた愛称で、正式名称は、杉並区立杉並芸術会館。高円寺会館の老朽化にともない、その跡地に「文化芸術の創造及び発信並びに区民の文化活動の拠点」として杉並区が新たにつくった劇場で、2009年5月に開館。今年（2024年）で15周年を迎える。

運営は、オープン前の準備段階から、指定管理者としてNPO法人劇場創造ネットワークが担う。区は5年の任期ごとに公募を行い（2期目のみ非公募）、指定管理者を選定している。施設の管理のための経費は、杉並区が負担。一方、公演等の事業に必要な経費については、決められた限度額の範囲で経費の3分の1を区が負担、残りの3分の2以上については、指定管理者が調達しなければならない。かなり高いハードルだが、視点を変えれば、区民からお預かりした税金の3倍以上の事業を行い、区民に還元しているということであり、そのことを評価されると信じている。

座・高円寺には、3つのホールがある。1階の「座・高円寺1」は、舞台と客席の形状を自由に変えることのできる約230席のホール。演劇や舞踊などの公演を、主催と提携合わせて年間約30企画250回の公演を行っている。天井高が高く赤い壁に囲まれたこの正方形の空間には、空中芸のサーカスがよく似合う。地下2階の「座・高円寺2」は、約260席の固定席を持つスタンダードなホールで、区民をはじめ一般の方への貸し出しをしている。そしてもうひとつ地下2階にある平土間の「阿波おどりホール」では、高円寺の名物阿波おどりの連が練習に励んでいる。

ホール以外にも、けいこ場、小道具や衣装をつくる作業場、演劇資料室、ギャラリー、カフェなどが、地上3階地下3階の建物のなかにコンパクトに収まっており、ホールへの搬出入もしやすく、使い勝手がいい。

ものづくりための専門的な設備があるからだけではない。専門のスタッフが、芸術監督の方針に則って自覚的かつ自発的に活動を行なっている、という意味で、座・高円寺は「劇場」を名乗っており、英語名をザ・コウエンジ・パブリック・シアター、アート・ホールではなく、シアターとしているのもそれゆえだ。

シアターの前についているパブリック、劇場の担う公共性――誰に向かって開くのか、誰のためのものなのか――については、漠然としたみんなではなく、具体的に顔の見える誰か、つまり地域の人たちとのつながりにおいて考えるために、初代芸術監督の佐藤信さんは、座・高円寺を「広場」というより町のなかの「空き地」に喩えた。いつ来ても、自分の楽しみを見つけられる。用もなくやってきて、ただぼうっとする。遊びほうける。友達を見つける。誰でも受け入れてくれる場所。それは、町の人が「座」に込めた思いと一致する。

町とともに

高円寺は、13の商店会と19の町会からなる、活気のある町だ。古着屋、古本屋、ギャラリー、カフェ、ライブハウス、居酒屋、お寺や神社が、人々の暮らしのなかにひしめき合い、どこか懐かしい感じと最先端が入り混じっている。北の端から南の端まで約30分、気の向くままに散策するのが本当に楽しい。海外からやってくるアーティストも「これこそ私たちが求めていた、観光地ではないディープな東京!」と興奮する。

そして毎年8月末、高円寺の町は阿波おどり一色にそまる。1万人を超える踊り子と100万人の観客が集まると言われる「東京高円寺阿波おどり」は、町の人たちが中心になって運営しているお祭りだ。

そんなパワーのある町の一員にしてもらえるだろうか、顔を覚えてもらえるだろうか。不安を抱きながら、開館前に私たちは町を走り回った。お店の方と話をして「座・高円寺を応援します!」ステッカーを貼ってもらった。阿波おどりのお祭りでは、大勢のボランティアスタッフと一緒に雨に濡れながら桟敷席づくりやゴミ拾いを手伝った。初代館長の斎藤憐さんは、商店街や学校へ積極的に働きかけ、面白いことをやっている人がいると聞けばすぐに会いに行って、協力を仰いだ。大きな背中を丸くして自転車で走り回る憐さんの姿は、町の人の話題になっていた。

開館後は、カテゴリーやジャンルを超えて、町とともにある仕掛けをたくさん考えた。町の福祉団体のメンバーにロビー入り口で苔玉などを販売しながら、劇場の顔となってもらった。1年に2回発行するフリーマガジン「座」では、劇場の半年分のプログラムよりも多くの紙面を町の魅力を紹介する特集に割き、発信する。ゴールデンウィークには町中を舞台にしたフェスティバル「高円寺びっくり大道芸」を、2月には町中のお店を寄席に変え、落語や講談を繰り広げる「高円

寺演芸まつり」を、町の人々とともに立ち上げた。毎月第3土曜日は「座の市」、劇場の前のエントランススペースで、農福連携を実践している農家の野菜や、近隣の店から口コミで広がった約20店舗が集まる。2階のカフェ「アンリ・ファーブル」では、シェフやパティシエたちが、杉並野菜を使ったパスタや定食、スイーツに腕をふるう。

町の一員になれたかな、と感じられた瞬間があった。5年の指定管理の任期満了にあたり、区が新たに指定管理者の公募をはじめ、私たちも継続した運営に立候補するために準備をしていたころ、そのようなシステムをご存じないある店主から「え、どうして？ 変わっちゃうの？ 区はわかってないなあ、建物じゃないんだよ、大切なのは。人なんだよ」と素朴な疑問を投げかけられたときだ。信頼してもらえているかな、と少しだけ確信を持つことができた。

劇場のサービスとしての託児

託児について考え始めたとき、私たちが相談を持ちかけたのは、やはり地域の方々だった。小さな子どものいるお母さんお父さんにも芝居を楽しむ時間をつくってほしい。でも、託児専用のスペースがあるわけでもない、充分な予算もない、ノウハウもない。子どもを預ける側、預かる側、劇場の三者が少しずつ負担をすることで、なにかいい仕組みを考えられないか。

早速、地域で子どもたちのための活動や子育て支援をしている団体に協力をお願いした。まず託児サービスをつける日をどうするか。夜はできれば家族で過ごしてほしいことから、平日と土曜日の昼の公演に託児サービスをつけることとした。その回数は、年間約50回。主催と提携合わせた全公演数の5分の1にあたる。ちなみに実際に託児の申し込みがあるのはそのうち20日程度。料金は、預ける側の負担はなるべく少なく、子どもひとりにつき1,000円にした。足りない分は劇場が負担して、保育者の方への支払いに充てる。場所は地下3階にあるけいこ場を使い、託児専用のスペースではないことから、対象から乳幼児は外して、1歳から未就学児までの子どもを預かることとした。申し込みは公演当日の一週間前まで。託児の申し込み時には、子どもの好きな遊びや健康状態などを私たちが親から訊き、事前に保育者に伝える。急に具合が悪くなるなど託児中に子どもになにかあったときにすぐに連絡ができるよう、座席番号を把握しておく。

必要な遊び道具は、保育者の方からアドバイスをいただきながら揃えた。人気があるのは、ゴミ収集車のミニカーとアンパンマンの絵本だが、実は特別なおもちゃはいらないことがわかった。紙やホワイトボードに絵を描く、やわらかいボールを投げっこする、大きな布を使ったかくれんぼ、プラスチックのチェーンを入れたペットボトルをマラカスのように振って踊る、幅の広いゴムを大きな輪っかにして電車ごっこをする……どれも単純だが、子どもたちは夢中になる。

遊びに飽きたら、保育者と一緒にけいこ場を抜け出して、劇場のなかの探検に出かける。となりのけいこ場で俳優たちが衣裳を身に着けて演じている様子をガラス越しに、作業場で中学生がウレタンを切ったり貼ったりして大きな着ぐるみを製作している様子をドアの隙間からそっと、おそらく初めて目にする驚きと、自分も一緒にやってみたいという好奇心の入り交ざった眼差しで、じっと見つめている。少し大きな子は、エレベーターに乗って地上にあがり、敷地内を散歩したり、2階のカフェに並んでいる絵本を読みに行ったりすることもある。

帰り道、子どもたちはこの小さな冒険のことを、話すのだろうか。それとも心のなかにしまっておくのだろうか。いずれにしても、お母さんもお父さんも子どもも、それぞれが楽しい時を過ごして、ここに来た時よりちょっと多くの余白が心のなかにできたとしたら、晩ごはんもいつもより美味しく感じるだろう。明日も笑顔で過ごせるだろう。

杉並区には、「子育て応援券」という独自のシステムがある。年齢に応じて有償、無償の違いはあるが、就学前の子どものいる家庭に配布され、子育て講座や親子で楽しむイベント、ひととき保育などのサービスに利用できる。座・高円寺での託児にもこの応援券を使えたらさらに利用しやすくなるはず、ということで、託児をお願いする団体には、子育て応援券の使えるサービス提携事業者として登録していただくことにした。

しかしそのためには、ガイドラインに定める審査基準を満たさなければならず、子どもの数に対する必要面積の確保と保育者の数の遵守、有資格者の配置などが求められた。幸いけいこ場は十分に広く、必要面積の確保は問題がなかったが、保育者の数に関しては、預かる子どもがひとりでも、保育者がふたりいなければならない。さらに、ひとりは保育士、看護師、保健師、助産師のいずれかの資格を持っていなければならない。年間50日、最低ふたりの保育者に公演の一週間前まで待機していただくことは、大変なご負担だ。それでも、子どもたちを迎えに来た時のママやパパの笑顔を見るのがなによりと、座・高円寺での託児に協力してくださっている。

常に頭の片隅からはなれない心配は、保育者の高齢化と人数確保の問題である。子どもが急に走り出したときにとっさに動けないと無理なのよと、まだまだお元気そうに見えても引退される方もいる。どうしても保育者が足りない時には、おとなりの保育園の先生に助っ人として来ていただいたこともあった。現在お願いしているNPO法人ちぃきちぃきは、三つ目の団体で、若い保育者たちの輪を広げていっており、長く続けていただきたいと思っている。

子どもたちとともに

座・高円寺では、明日の主役である子どもたちに、家庭や学校とは違った人や価値観に出会い、生きる力にしてほしい、という思いか

世界をみよう！『ロミオとジュリエット』（シアター・リフレクション）2023

みんなの作業場（ロビーに飾るフラッグをつくるワークショップ） 2023年

劇場へいこう！ テレーサさんが子どもたちに語りかけている様子 2023年

ら、「あしたの劇場」と名づけたプログラムを事業の中心に据えている。

毎年7月には、言葉がわからなくても誰でも楽しめるような、国内外の小さな作品を集めたフェスティバル「世界をみよう！」を開催。招聘する作品の多くは、例えば0歳〜4歳というように子どもの成長に合わせてつくられていて、台詞は少なく上演時間は30分ぐらい、舞台と客席の距離が近く、空間全体が子どもも大人もやさしく包みこんでくれるので、リラックスしつつ集中して観ることができる。またそれらは、演劇やダンス、サーカス、人形劇、インスタレーションといった既存のジャンルに収まりきらないのが特徴的で、分類することをまだ知らない子どもの広い感受性によく似合っている。「世界をみよう！」で観劇デビューをする地域の親子も多い。

9〜10月は、「劇場へいこう！」。子どもたちが家庭環境に関係なく、一度は劇場で芝居を観る機会を持てるよう、区立小学校全校（現在40校）の4年生（学校によっては5年生）全員約3,000人を招待するプログラムだ。

これが初めての演劇体験になる子どももいる、そんな重責を最初に背負っていただいたのは、イタリアの脚本家、演出家のテレーサ・ルドヴィコさん。彼女は私たちに「複雑な現代社会に生きる子どもの成長の助けになるような作品をつくろう」と提案してくれた。「これから思春期を迎え、やがて大人になっていく子どもたちは、自分自身の変化の過程で、不安になったり時に暴力的になったりすることがあるかもしれない、でも決してひとりではなく、見守ってくれる、助けてくれる存在があることを信じ、変化を受け入れ、前に進む勇気を持ってほしい、演劇にはその手助けをする力がある」というゆるがない信念に、私たちは賛同した。

テレーサさんとは、3つの「旅する物語」をつくった。『旅とあいつとお姫さま』は青年が愛するお姫さまを探して旅をしてお姫さまにかかった悪い魔法が解かれる物語、『ピノッキオ』は誘惑に駆られて旅をして、『小さな王子さま』は自分の住む小さな惑星を飛び出し宇宙を旅して、自分自身と出会う物語。子どもたちは人生さながら、主人公と一緒に、友達や先生と一緒に、困難に直面し、応援したり目を覆ったりしながら、困難を乗り越えていく。

公演終了後、テレーサさんは子どもたちの前に出てきて語りかける。「私はちょうどみなさんぐらいの年の子どもたちのために、このお芝居をつくりました。王子はみなさん自身です」。すると子どもたちは目を輝かせて、とても嬉しそうな顔をする。「キツネはみなさんのすぐそばにいるかもしれませんよ」と言うと、となりに座っている友達の顔を見て笑い合う。『ピノッキオ』を観た後に「僕も変われるのかな」と呟いた子もいた。

単に楽しいだけではない、大人にも子どもにも語りかける力を持つ、テレーサさんの多層的な「全観客向けの（pour tout public / per tutto pubblico）」作品は、「劇場へいこう！」の代名詞となっていった。

これらの作品は、中学生以下を無料にした一般向けの上演も行なっていて、劇場のレパートリーとして6〜7年間上演を続けている。子どもが学校で観に行って面白かったというので家族で観に来ました、学校で観に来たのとは違う作品が観たくて来ました、毎年観に来ています、といった声も多い。

土曜日の午前中は「絵本の旅＠カフェ」。カフェにある約250冊の絵本の中から好きな絵本を選び、ボランティアの「本読み案内人」の方のところへ持っていくと、寄り添って読んでもらえる。逆に子どもが大人に読んであげても、親子で読んでも、自由に絵本と向き合う、ゆったりとしたひとときだ。また、平日にはカフェのオープン前の時間に、近所の保育園の子どもたちがお散歩の途中で立ち寄って、先生と一緒に絵本を読んでいくことも増えている。

日曜の午前中は「みんなの作業場」。さまざまな分野のアーティストや町の方を招き、子どもたちに表現の楽しさを発見してもらう。ダンス、俳句、紙切り、世界でひとつの帽子や服づくり、ラップ、ディベート、耳が聞こえなくてもみんなが一緒に遊べることばづくり。時には町へ出かけて、駅や神社を訪問したり、布団屋さんで枕をつくったり。劇場のスタッフに音や明かりの秘密を教えてもらったり、カフェのシェフとパスタをつくったり。

送り迎えをする保護者には見学を遠慮していただいており、子どもたちは、新しく出会う大人や仲間と一緒に2時間を過ごす。思い通りにならなくて癇癪を起こしても、途中でやりたくなくなっても、自分自身と真剣に向き合っている子どもたちを、スタッフは辛抱強く見守り続ける。毎週来る子、小学1年生から6年間通い続ける子もいて、この場に慣れている子どもたちは、小さな子を手伝ったり、心配そうにしている子がいたら話しかけたりと、一緒にいる仲間を自然と気遣う雰囲気が生まれているのも「みんなの作業場」ならではだろう。

1年間の集大成として、ゴールデンウィークには、座・高円寺1の空間を巨大な遊び場に設えて「みんなのリトル高円寺」を開催する。はじめのうちは、大人のスタッフが全てを担っていたが、数年前から「みんなの作業場」を卒業した中学生や高校生が、コンセプトや空間の

デザインを考え、プロのスタッフはそれらを実現するための後方支援に回っている。

取り立てて多様性などを謳っていないのに、こうした通年で行なっているワークショップには、学校になじめない、日本語がわからない、養護学校に通っている、といった子どもたちが、ある一定の割合で参加している。また、中学生の職場体験には、特別支援学級の子どもたちもやって来る。

それはなぜか、はっきりとはわからないがおそらく、いつでも受け入れてもらえる、居心地がいい、ひとりでいても孤独ではなく周りにいる人の存在を感じる、そんな空気というか気配を、劇場がまとっているからだと思う。私たちが時間をかけてつくってきたのは、そんな気配なのだ。それは魔法に近いかもしれない。

それぞれ持ち場が違っても、座・高円寺で働くスタッフに共通する専門性があるとすれば、それは知識を教えることではなく、ともにいる人に耳を傾けること、できないではなくどうやったらできるかを考えること、おかれた状況において自分がどんな役割を担えるか考え、その役割と活動を拡げること、そんなドラマトゥルク的視点ではないだろうか。

そして座・高円寺は、今日も扉を開いている。抽象的なイメージとしてではなく、朝から閉館まで、劇場の正面入り口の扉を開け、町と劇場を、外の世界と内の空き地を地続きに、まるでひとつの空間のようにつなぐ。雨の日も風の日も空き地を耕し、ウゾウムゾウを待っている。

石井 恵（いしい・めぐみ）

座・高円寺（杉並区立杉並芸術会館）企画・制作チーフ。世田谷パブリックシアター学芸係を経て、座・高円寺開館時より現職。共訳に『コルテス戯曲選』（れんが書房新社）『演劇学の教科書』（国書刊行会）『ヤン・ファーブルの世界』（論争社）。

https://za-koenji.jp/

イベントのお知らせ

当財団「助成事業に係る広報活動やネットワーク構築」の一環として、2024年6月と7月に「舞台芸術活動と育児の両立について考える会」を森下スタジオとオンラインで開催いたします。詳細はウェブサイト（QRコード）をご覧ください。

セゾン文化財団　ご支援のお願い

セゾン文化財団では、当財団の趣旨に賛同し、活動を支援していただける法人賛助会員および個人の皆様からのご寄付を募っております。
新しい文化を創造するアーティストや研究者の活動に、ぜひお力をお貸しください。
詳細につきましては下記URLにてご覧いただけます。
https://www.saison.or.jp/support

当財団の活動に対しましてご理解・ご支援をいただいています以下の法人賛助会員および個人の皆様に深く感謝いたします。

（五十音順）

法人賛助会員のご紹介（2023年度）

セゾン投信株式会社*	https://www.saison-am.co.jp/
株式会社パルコ	https://www.parco.co.jp/
株式会社良品計画	https://ryohin-keikaku.jp/

（*4口ご加入）

寄付者ご芳名（2023年度）

市村作知雄様	福井健策様
小野晋司様	吉本光宏様
田中里奈様	匿名（1名様）
中村恩恵様	

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター 第103号

2024年4月30日発行
編集人: 久野敦子
編集:　岡本純子、福冨達夫
発行所: 公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階
Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565
URL: https://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp

● 次回発行予定: 2024年8月
● 本ニュースレターをご希望の方は送料（94円）実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。
また最新号およびバックナンバーは当財団の以下のウェブページでもお読みいただけます: https://www.saison.or.jp/library